

誰が駆除・放流に賛成するのか？：  
外来種駆除および放流活動にかんする計量分析  
Who Agrees to the Control of Invasive Foreign Species,  
and Releasing Fish or Fireflies?

渡邊 悟史

成蹊大学一般研究報告 第 52 卷第 2 分冊

令和 2 年 6 月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 52 No. 2

June, 2020

# 誰が駆除・放流に賛成するのか？： 外来種駆除および放流活動にかんする計量分析

Who Agrees to the Control of Invasive Foreign Species,  
and Releasing Fish or Fireflies?

渡邊 悟史

Satoshi WATANABE

## 【要旨】

どのような人が生き物の駆除または放流活動に賛成するのかを調べた。これまで、人々の属性や階層的地位、生き物への意識が、駆除・放流への態度にどう影響するのかは、はっきりと分かっていなかった。そこで、東京都西東京市在住の20～70歳を対象に郵送調査を実施し、そのデータを分析した。分析の結果、年齢の高い人ほど駆除活動への賛成傾向がみられた。また、「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」と思う人ほど、放流活動に賛成し、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」と思う人ほど、駆除・放流活動両方に賛成した。

キーワード：外来種駆除、放流、ミドリガメ、ザリガニ、ブラックバス、コイ、アユ、ホタル

## 1. リサーチ・クエスチョン

### 1.1 背景：駆除と放流の現在

最近、テレビ番組で外来種の駆除活動が（ときにセンセーショナルな形で）ひんばんに取り上げられるようになった（緊急SOS池の水ぜんぶ抜く大作戦（テレビ東京系列）、ザ！鉄腕！DASH!!（日本テレビ系列）など）。外来種食愛好家（invasivore）も目立ってきており、関連するイベントも盛んである。

しかし、外来種の駆除は、在来の生態系を保全するために重要とされるが、抵抗感を持つ人もいるだろう。たとえば、先鋭的な例としてノネコ（野生化した猫）の取り扱いをめぐる論争がある（小栗 2019）。あるいは、2005年に施行された、いわゆる外来生物法に基づく第一次指定種に紆余曲折を経てリストアップされたブラックバス（オオクチ

バス・コクチバス)も、その駆除の是非をめぐる事あるごとに論争が繰り返されている(最近の論争の例として、根本 2019)。

一方、放流は、減少しつつある生き物や有用な生き物を増やす活動として人気がある。ところが放流には、じつは生物多様性を損なうリスクがあり、生態学的には望ましくないものも多いとされている。たとえば、日本魚類学会が作成した『生物多様性の保全をめざした魚類の放流ガイドライン』では、「希少種や自然環境の保全をめざして、メダカやコイを含む魚類の放流が各地で盛んに行われている現状がある」ものの、「本来の生物保護や生物多様性の保全に役立っていなかったり、むしろ有害な場合すらある」と懸念が表明されている(日本魚類学会 2005)。同じように、日本鳥学会は、放鳥されたコウノトリやトキへの給餌を目的として淡水魚を放流する活動は、「生物多様性の保全の上で、遺伝的な攪乱を生じさせる恐れが高い行為」であると警告を発している(日本鳥学会鳥類保護委員会、2019)。

つまり、生態学的には、外来種駆除は原則として必要であり、放流は、しなくてはならないのであれば極めて慎重に行うべきということになるだろう。しかし、これは誰もが共有している考えではないだろう。それでは、どのような人が駆除や放流に肯定的なのだろうか。

## 1.2 リサーチ・クエスチョンと先行研究

そこで、本研究では以下のリサーチ・クエスチョンに取り組むことにしたい。

リサーチ・クエスチョン：属性(とくに年齢や子どもの有無)や階層的地位(とくに教育)によって、あるいは生き物への意識のあり方によって、駆除や放流への態度に差があるのか

この問題を解決することで、環境教育を実践する人は、ターゲットを絞ることができるかもしれない。また、駆除・放流をめぐる「分断線」がどこに生じる可能性があるのか分かるかもしれない。ぎゃくに、この問題を解決しないと、異なる意見を持つ人を勝手なイメージで非難することも起こるかもしれない。

なお、本研究は駆除・放流のあり方や是非について判断するものではなく、人々の駆除・放流に対する態度の実態を明らかにすることを目的としている。

## 1.3 仮説

では、駆除と放流は、どのように人々の属性や生き物への意識と関連していると予想できるだろうか。まず、この2つの活動は、自然に介入し、自然を自分の思い描く形に近づけようとするものだと言える。したがって、自分にとって目指すべき自然の姿をはっきりと思い描ける人ほど、駆除・放流に賛成するだろう。そういう人の年齢は高いと予

想できる。なぜなら、子どものころ遊んだ、回帰すべき「原風景」を持っている可能性が高いだろうからである。

仮説1：年齢が上の人ほど、都市化以前の「自然の原風景」を持つため、駆除・放流に賛成するだろう。

つぎに、人間以外の生き物との近さについて考えておきたい。生き物にかかわる機会の多い人は、生き物をめぐる問題に敏感だろう。都市で考えたときに、生き物との近さをもたらすのは、子どもの存在かもしれない。子育ての過程で、子どもが虫に興味を持ったり、一緒に動物園に行ったりして、生き物の情報に触れることがあったかもしれない。そこで、子どもを育てた経験のある人は、在来種を守り、減りつつある生き物を増やそうとする、と予想してみる。

仮説2：子どもを持つ人ほど、生き物の問題を解決するため、駆除・放流に賛成するだろう。

階層的地位の影響はどうだろうか。教育年数の長い人ほど、科学的発想に親しんでいるだろう。そのため、最新の生態学の知見に敏感かもしれない。そこで今回は階層的地位を教育年数の長さで測定する。

仮説3：教育年数が長い人ほど、生態学の知見に触れる機会が多いため、駆除に賛成し、放流に反対するだろう。

生き物への意識についてはどうだろうか。まず、生き物の命をなるべく奪いたくないという考えがあるだろう。こういった考えは、放流に対して肯定的に作用すると予想できる。

仮説4：「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」と思う人ほど、生き物を殺さずに増やす活動に親近感を持つため、放流に賛成するだろう。

つぎに、自然を利用価値のある資源としてみる考え方もある。こうした考え方は、資源の利用が妨げられることを嫌うだろう。そして、在来種が守られたり、増えたりすることを好ましいものとするだろう。

仮説5：「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」と思う人ほど、資源としての生き物の絶滅を避けようとするため、駆除・放流に賛成するだろう。

本研究は、以上5つの仮説を質問紙調査の分析によって検証することを目的とする。

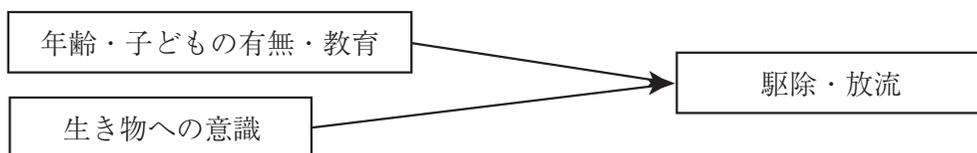


図1 仮説

#### 1.4 先行研究と本研究の特徴

日本を舞台とした駆除にかんする意識調査には、西川他（2011）や西村（2014）がある。西川他（2011）は、計35種の外来種・在来種に対しての防除・保全意識を、市場調査会社を通じたインターネット・アンケートによって調べた。質問文の前には、対象種の生息状況や生態、法律にかんする説明文を設けている。西村（2014）は、滋賀県の環境保全活動団体の会員に対して防除すべき外来種・保護すべき在来種を質問紙調査によって質問した。

これら先行研究に対して、本研究は、①ランダムに抽出された対象者に、②生物種の事前情報を与えずに質問紙調査を行った。この2点を満たしている社会学的調査は、まだない。また、放流についての社会学的な量的調査は、見つからなかった。

## 2. データと変数

### 2.1 データ

データとして2019年（第11回）暮らしについての西東京市民調査を用いる。ランダムサンプリングに基づく郵送調査で、2019年6月から8月に実施された。西東京市は多摩地域東部にある人口205,040人（2020年2月）の都市化された地域であり、この地域のデータを用いることで、都市的環境に住まう人の駆除・放流への態度を理解することができるだろう。

母集団は東京都西東京市の20～70歳個人（2019年12月31日が基準日で、1949年1月1日から1999年12月31日生まれ）で、標本は2段無作為抽出法で抽出された。まず29選挙区から15選挙区を、人口規模を考慮しランダムに系統抽出。そして各地点で16人ずつ、計240人を選挙人名簿を用いてランダムに系統抽出し、208人を新規標本とした。これに、前年度に同様に抽出され回答した者292人をパネル標本として追加し、有効標本は500人とした。有効回収数は310人（有効回収率は62.0%）。調査票を含む、より詳しい調査についての情報は、小林・渡邊（2020）を参照されたい。

本研究では得られたデータのうち、分析で用いるすべての変数で欠損値を含まない287ケースを使う。287ケースの構成は、男性47.0%／女性53.0%、20歳代12.5%／30歳代16.7%／40歳代21.6%／50歳代25.4%／60～70歳代23.7%、平均年齢48.0歳、未婚

26.8% / 既婚65.9% / 離別5.6% / 死別1.7%、中学校卒1.7% / 高校卒35.9% / 短大・高専卒11.5% / 大学卒46.3% / 大学院卒4.5% (専門学校など除く公的教育のみ)、平均教育年数14.3年、正規雇用44.3% / 非正規雇用28.6% / 自営業9.1% / 無職18.1%、個人年収は0～200万円37.3% / 200～400万円くらい26.1% / 400～600万円くらい15.3% / 600～800万円くらい8.4% / 800～1000万円くらい8.4% / 1000万円～1500万円くらい3.8% / 1500万円以上0.7%、世帯年収は0～200万円6.3% / 200～400万円くらい15.3% / 400～600万円くらい17.8% / 600～800万円くらい23.0% / 800～1000万円くらい16.4% / 1000万円～1500万円くらい15.7% / 1500万円以上5.6%だった。

## 2.2 生き物への意識についての質問

「生き物についての以下の意見に、賛成しますか (○はいくつでも)」と質問した。選択肢は、「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」とした。

「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」および「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」に対する回答は、いずれもダミー変数として扱って、以下では、かけがえのないものダミー、役立てるべきダミー、とよぶ (賛成 = 1、賛成しない = 0)。

## 2.3 駆除・放流についての質問

「それでは、以下のうち、どれを行なうべきだと思いますか (○はいくつでも)」と質問した。選択肢は「ミドリガメの駆除」「ザリガニの駆除」「ブラックバスの駆除」「アユ (鮎)、コイ (鯉) の放流」「ホタルの幼虫の放流」とした。

「ミドリガメの駆除」「ザリガニの駆除」「ブラックバスの駆除」「アユ (鮎)、コイ (鯉) の放流」「ホタルの幼虫の放流」に対する回答は、いずれもダミー変数として扱い、それぞれミドリガメ駆除ダミー、ザリガニ駆除ダミー、ブラックバス駆除ダミー、アユ・コイ放流ダミー、ホタル放流ダミーとよぶ (賛成 = 1、賛成しない = 0)。

選択肢においては、まず生き物は、人々の馴染みがありそうな種を選び、それらを馴染みのある呼称で記述することとした。選択肢とした種は、いずれも駆除・放流の対象種として知名度のありそうなものである。呼称については、プリテストを経て、ミシシッピアカミミガメよりはミドリガメを、(ウチダザリガニやニホンザリガニの生息域で調査するのではないので)アメリカザリガニよりはザリガニを、オオクチバスよりはブラックバスを選択した。クビアカツヤカミキリなどの昆虫は馴染みのなさから、アライグマやノネコは駆除対象としての知名度のなさから、選択肢から除外した。アユとコイを同一の選択肢にすることは、ダブルバーレルとなるため望ましいことではないが、プリテスト回答者が魚類をあまり区別していないようなので、統合することとした。

## 2.4 属性・階層についての質問

教育については、本人の最終学歴を質問した（教育年数として利用。中学卒=9、高校卒=12、短大卒=14、大学卒=16、大学院卒=18。）。また、子どもの有無については、「自分の『子ども』（連れ子、養子は除く）」の人数を質問し、回答は子ありダミーとして用いる（あり=1、なし=0）。他に属性として性別（男性ダミーとして利用）、生年、婚姻状態、個人年収・世帯年収を質問した。今回は統制変数として性別を用いる。

## 3. 記述統計

### 3.1 分布

まず、「ミドリガメの駆除」「ザリガニの駆除」「ブラックバスの駆除」「アユ（鮎）、コイ（鯉）の放流」「ホタルの幼虫の放流」に賛成の人の分布をみると、それぞれ全体のうち38.1%、21.6%、51.9%、38.1%、47.1%だった。「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」に賛成の人は69.7%、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」に賛成の人は38.7%いた。

### 3.2 グループ別の比較

では、どのような人が駆除・放流に賛成するのだろうか。グループ別に比率を、カイ二乗検定を用いて比較した（図2）。駆除・放流の各種いずれも、性別グループ、年代グループ、子どもの有無グループ、最高学歴グループを比較したところ、統計的に有意な違いはなかった（図2a、図2b）。

生き物への意識についてみると、いずれも統計的に有意な差があった。「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」と思う人ほど、アユ・コイ放流とホタル放流に賛成した。また、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」と思う人ほど、アユ・コイ放流以外の活動に賛成した（図2c）。

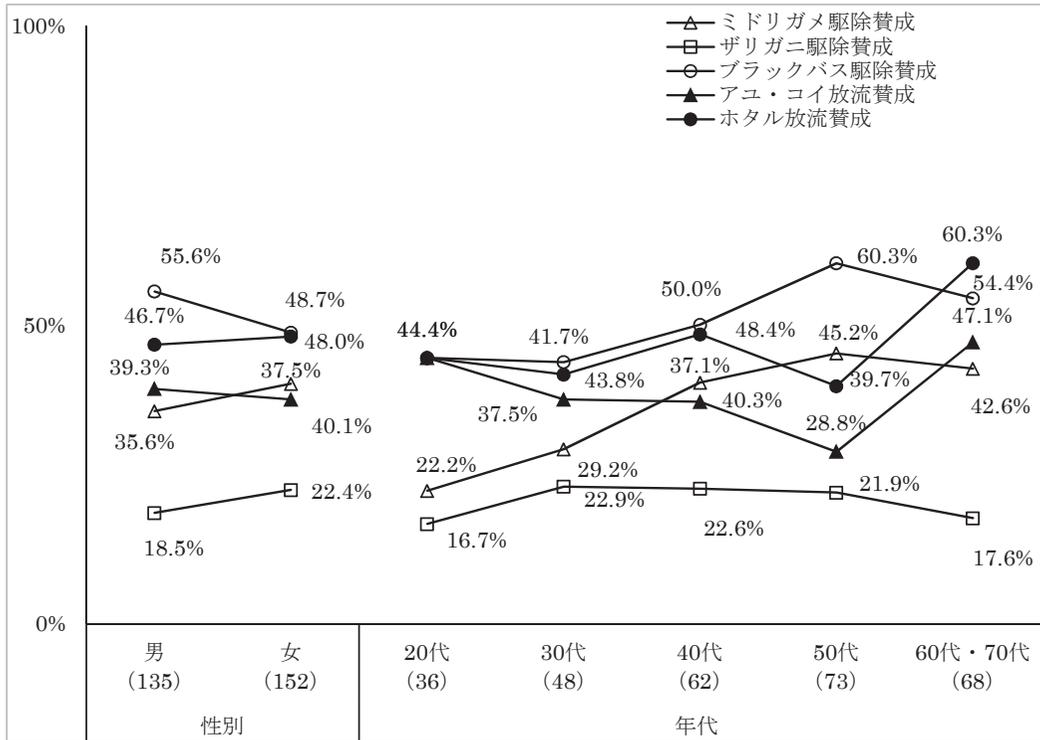


図2a グループ別の駆除・放流に賛成した人の比率（性別・年代）

N=287。( )内は人数。x<sup>2</sup>乗検定で、<sup>†</sup>p<0.10、\*0.05、\*\*0.01、\*\*\*0.001。n.s.（有意でない）の記載は省略。

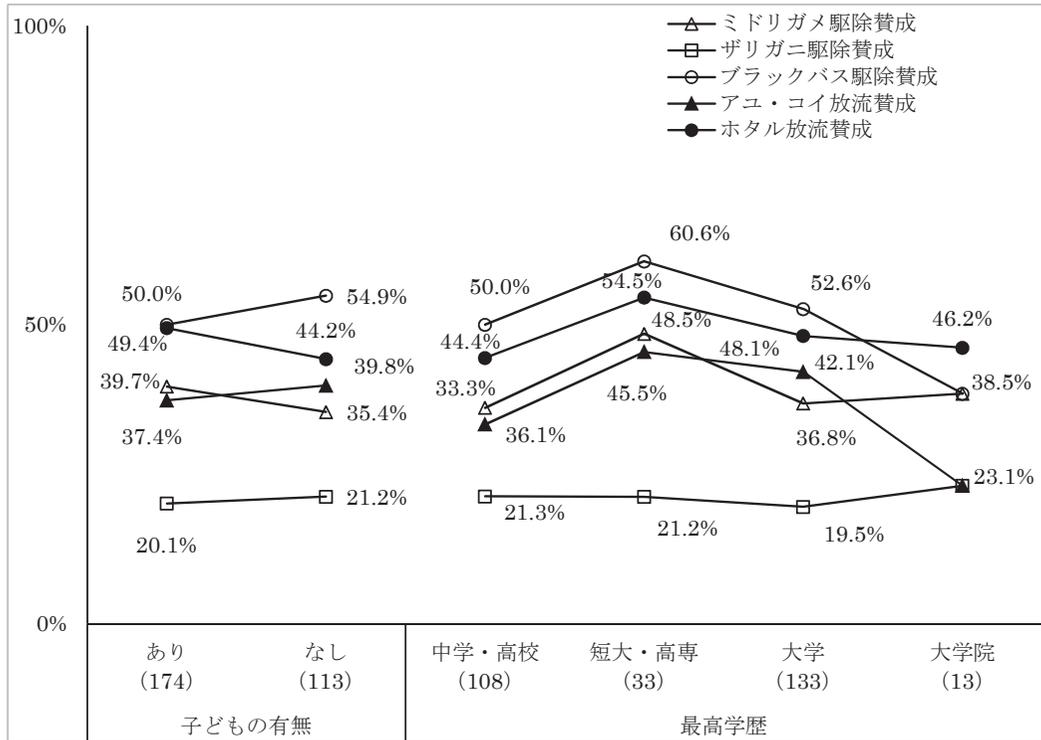


図2b グループ別の駆除・放流に賛成した人の比率（子どもの有無・最高学歴）

$N=287$ 。( )内は人数。 $\chi^2$ 乗検定で、 $^{\dagger}p<0.10$ 、 $*0.05$ 、 $**0.01$ 、 $***0.001$ 。n.s.（有意でない）の記載は省略。

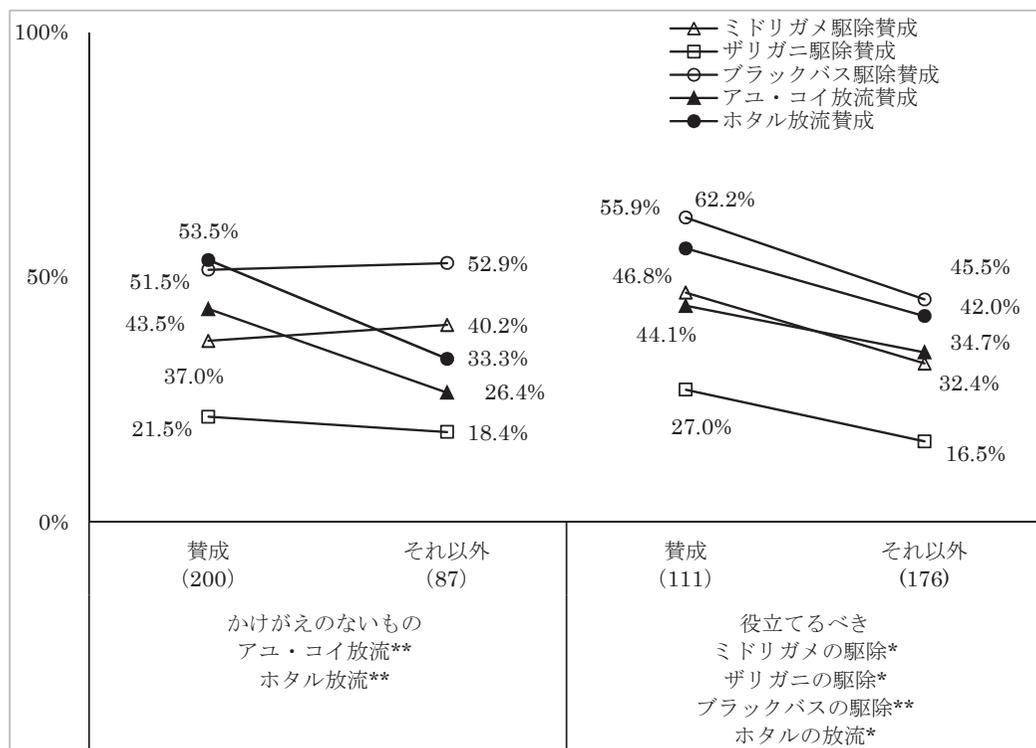


図2c グループ別の駆除・放流に賛成した人の比率（かけがえないもの・役に立てるべき）  
 N=287。（ ）内は人数。x<sup>2</sup>乗検定で、<sup>†</sup>p<0.10、\*0.05、\*\*0.01、\*\*\*0.001。n.s.（有意でない）  
 の記載は省略。

### 3.3 回帰分析（仮説の検証）

こうした結果は、複数の変数で統制しても変わらないのだろうか。そこで、それぞれの駆除・放流への態度を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った（表1）。その結果、属性・階層についてみると、ミドリガメ駆除とブラックバス駆除に対し、年齢が有意な正の効果を持った。つまり、年齢が上がるほど、ミドリガメ駆除とブラックバス駆除に賛成する効果があった。よって、仮説1は駆除にかんしてはおおむね支持され、放流にかんしては支持されなかった。また、子どもの有無および教育年数は効果を持たなかった。よって、仮説2・3はいずれも支持されなかった。

また、生き物への意識についてみると、「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえないものだ」という意識が、アユ・コイ放流とホタル放流に対して正の効果を持った。そのため、仮説4は支持された。また、「自然の生き物を、人間はできるだけ役に立てるべきだ」という意識は、ミドリガメ駆除、ザリガニ駆除、ブラックバス駆除、アユ・コイ放流、ホタル放流に対していずれも有意な正の効果を持った。したがって、仮説5は支持されたと言える。

表1 駆除・放流への態度を従属変数としたロジスティック回帰分析結果

N=287。†p&lt;0.10、\*0.05、\*\*0.01、\*\*\*0.001。

		従属変数					
		ミドリガメ駆除ダミー		ザリガニ駆除ダミー		ブラックバス駆除ダミー	
		回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
属性・階層	男性ダミー	-0.314	0.786	-0.281	0.823	0.177	1.254
	年齢	0.028**	1.029**	-0.003	0.999	0.024*	1.026*
	子ありダミー	-0.207	0.908	-0.126	0.939	-0.545†	0.605†
	教育年数	0.069	1.078	0.011	1.041	0.055	1.060
意見	かけがえのないものダミー	-0.039	0.950	0.28	1.113	0.09	1.043
	役立てるべきダミー	0.609*	1.732*	0.724*	1.795*	0.705***	1.869***
-2 対数尤度		366.6		285.0		381.9	
Nagelkerke決定係数		0.066		0.021		0.066	

		従属変数			
		アユ・コイ放流ダミー		ホタル放流ダミー	
		回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
属性・階層	男性ダミー	0.071	1.062	-0.085	0.907
	年齢	-0.083	1.003	0.015	1.011
	子ありダミー	0.06	0.898	-0.014	1.072
	教育年数	0.842	1.071	0.096	1.084
意見	かけがえのないものダミー	0.508**	2.253**	1.021***	2.595***
	役立てるべきダミー	0.071*	1.692*	0.753**	1.973**
-2 対数尤度		367.6		395.1	
Nagelkerke決定係数		0.053		0.085	

### 3.4 頑健性のチェック

なお、子どもの有無を婚姻状態に変更しても、教育年数を個人年収や世帯年収に変更しても、おおむね同じ結果であった。ただし、ブラックバス駆除については年齢の効果が消えることもあった。年齢のブラックバス駆除への効果は、ミドリガメ駆除への効果ほど、頑健とは言えない。

## 4. 考察

### 4.1 分析結果の要約

- (1) 仮説1は、駆除にかんしてはおおむね支持され、放流にかんしては支持されなかった。年齢が上がるほど、ミドリガメ駆除とブラックバス駆除へ賛成した。
- (2) 仮説2・3は、いずれも支持されなかった。子どもの有無および教育年数は駆除・放流への態度に効果を持たなかった。
- (3) 仮説4は支持された。「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」という意識が、アユ・コイ放流とホタル放流に対して正の効果を持った。
- (4) 仮説5は支持された。「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」という意識は、ミドリガメ駆除、ザリガニ駆除、ブラックバス駆除、アユ・コイ放流、ホタル放流に対していずれも正の効果を持った。

### 4.2 考察

今回分析に使用した属性および階層的地位にかんする変数のうち、年齢のみがミドリガメ駆除とブラックバス駆除に正の効果を持った。年齢の高い人ほど、子どものころに遊んだような自然の「原風景」を具体的にイメージしやすいと考えられる<sup>1</sup>。そういった「原風景」においては、アメリカザリガニと比べると最近持ち込まれ、分布を広げたミドリガメやブラックバスは異物となるのだろう。この2種とは異なり、アメリカザリガニは戦前にはすでに関東地方へ持ち込まれており、「原風景」のなかに組み込まれていると思われる。ただし、頑健性のチェックで触れたように、ミドリガメ駆除とブラックバス駆除への年齢の効果のあり方は同じではない可能性が残っている。この点については今後の課題にしたい。一方、放流については年齢による違いはみられなかった。そもそも都市的環境では効果が薄いという判断が背景にある可能性がある。

つぎに、生き物への意識についてみてみよう。「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」という意識は、動物愛護の考えに通じるものがある。そこでは殺生を避けるとともに、駆除よりは放流という、命を増やすことを目指している活動へ肯定的な態度を促すだろう（じっさいに放流が本当に命を増やすのかどうか、命の多様性などのような影響があり得るのかは本研究の分析では考慮できない）。また、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」という意識は、自然を資源と考える立場に通じている。そこでは有用な資源を増やすとともに、資源の劣化を避ける態度が生まれるだろう。これが駆除・放流双方に正の効果を持った理由だと考えられる。

以上から、リサーチ・クエスチョンには次のように回答できる。

1 ただし、人々の思い描く「原風景」は、経験とメディア等で提示されるさまざまなイメージやノスタルジーの混成物であって、「じっさいにあった自然」の姿とは異なる可能性がある。こういった「原風景」への歴史実証的な批判のまとめと、その批判のあり方の検討は、松村正治と香坂玲が行っている（松村・香坂 2010:185-6）。

リサーチ・クエスチョンへの回答：駆除と放流への態度は、年齢と意識の持ち方によって異なった。年齢が上がるほど、ミドリガメ駆除とブラックバス駆除に賛成した。また、「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」という意識を持つ人ほど、放流に賛成し、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」という意識を持つ人ほど、駆除・放流両方に賛成した。

#### 4.3 先行研究との比較

西川他（2011）は、年齢が外来種駆除への賛成を促進すると報告している（西川他 2011：182）。一方、西村（2014）は、年齢の効果は一意的に言えず、若年層ほど魚類と哺乳類に対する駆除意識が高いとしている（西村 2014：70）。本研究では、ブラックバス駆除にも年齢の正の効果がみられた。西村（2014）の調査地は琵琶湖の近隣であり、地域固有の文脈が駆除意識の醸成に与える影響については今後考察をしていく必要がある。また、両先行研究ともに性別の影響は報告していない。本研究でも同様の結果が得られた。

#### 4.4 本研究の示唆

こうした分析結果は、既存の活動にどのような示唆を持つのだろうか。第一に、「生き物のいのちは、一匹一匹がかけがえのないものだ」という意識は、それ自体としては大切に育むべきものだろう。しかし、この意識は、ともすれば、生物多様性にとっては脅威になり得る放流を促進しかねない。たとえば環境教育においては、かならず科学的な知見をあわせて提示すべきだろう。

第二に、「自然の生き物を、人間はできるだけ役立てるべきだ」という意識は、外来種駆除にせよ放流にせよ、自然にかかわる活動に対して肯定的にはたらく。外来種駆除活動を推進するのであれば、この意識が自然の収奪に転化することを警戒しつつ、外来種駆除の人間にとっての利益を説くとよいかもしれない。

#### 4.5 今後の課題

- (1) 属性・階層的地位の影響については、より詳細な調査が必要であろう。とくに年齢の効果のメカニズムは、パネル調査などによって明らかにすべきだろう。それによって特定の性向を持つコーホートが浮かび上がるかもしれない。
- (2) 今回の調査では自然体験の有無や子どものころ過ごした場所については質問していない。駆除・放流への態度に影響する要素をより広く探索していく必要があるだろう。
- (3) 以上の論点については、質的調査と組み合わせる混合研究方法によって、重要な変数やその効果のメカニズムをより詳細に明らかにすることができるだろう。

## 謝辞

執筆にあたり、小林盾氏をはじめとして、川上洋一氏、南有哲氏、森田厚氏、矢部隆氏より有益なコメントをいただいた。ただし、文責はもちろん筆者にある。

## 参考文献

- 小林盾・渡邊悟史編、2020、『成蹊大学社会調査演習 2019 年度報告書：第 11 回暮らしについての西東京市民調査』成蹊大学社会調査士課程。
- 松村正治・香坂玲、2010、「生物多様性・里山の研究動向から考える人間－自然系の環境社会学」、『環境社会学研究』Vol.16(0)、179-196。
- 日本鳥学会鳥類保護委員会、2019、「コウノトリ等の放鳥と給餌に対する考え方について」、日本鳥類学会ホームページ（2020年2月10日取得、<http://ornithology.jp/iinkai/hogo/Hocho&Kyuji.pdf>）。
- 日本魚類学会、2005、「生物多様性の保全をめざした魚類の放流ガイドライン」、日本魚類学会ホームページ（2020年2月10日取得、<http://www.fish-isj.jp/info/050406.html>）。
- 根本太一、2019、「用水路の水、ぜんぶ抜こうとしたら…ブラックバス釣り人から抗議殺到 茨城・潮来」、毎日新聞ホームページ（2020年2月10日取得、<https://mainichi.jp/articles/20190928/k00/00m/040/058000c>）。
- 西村武司、2014、『外来種問題に対する意識と行動に関する研究：農業生産者とNPO会員を対象として』京都大学2014年度博士論文。
- 西川潮・今井葉子・今田美穂・柘植隆宏・高村典子、2011、「在来種と外来種の管理に対する人びとの意識」、西川潮・宮下直編著、『外来生物：生物多様性と人間社会への影響』裳華房所収、pp.167-188。
- 小栗有子、2019、「『ノネコ問題』とはなにか」、鹿児島大学鹿児島環境学研究会、『奄美のノネコ：猫の問いかけ』南方新社所収、pp. 17-38。

執筆者：渡邊悟史、成蹊大学文学部調査実習助手／非常勤講師

執筆日付2020年2月27日

推薦者：小林盾（成蹊大学教授）

（発行時現在：龍谷大学社会学部講師）

PRINTED BY  
SEIKO-SHA CO. LTD.  
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University  
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,  
Tokyo, 180-8633 Japan